

## バス通勤を始めて



小樽市医師会  
社会福祉法人北海道社会事業協会 小樽病院

堀田 智 仙

私は現在バスで通勤している。3年前に小樽協病院に勤務するようになってから、通勤は高速バスを利用している。小中高・大学と通学はすべて徒歩だった。医師になってからも歩いて通える範囲に住んでいた（転勤のたびに病院近くに部屋を借りた）ので、やはり徒歩で通勤していた。公共の交通機関を利用して毎日通勤するのは、私の人生において今回が初めてだ。朝6時半に札幌の自宅を出て20分くらいバス停まで歩いたあと、小樽行き高速バスで約45分。小樽のバス停で降りたら職場はすぐ近くなので、毎日片道1時間ちょっとの通勤になる。冬の寒い吹雪の朝など挫けそうになることもあるが、高速バスにさえ乗ってしまえば何とか職場までたどり着けるし、小一時間は読書や音楽鑑賞、そして物思いに耽ることができて、なかなか趣深い。今のところ高速バスでの移動は苦ではないし、むしろ「何読もうかな、何聴こうかな」と楽しんでいる。

私が朝乗る高速バスは、始発から2台目だ。1台目はいつも混んでいて、補助席まで埋まることが多い。2台目も最終的には混み合うのだが、私が乗車する時点ではまだ空席が残っていて、大抵「いつもの席」に座れる。座席はなんとなく「お決まりの席」というものがあって、「あの女の人から5番目の右窓側」「あのオジさんは2番目の左側」「あの中学生兄弟は前の方」など、何となく座る席が決まってくる。私は「8番目の右窓側」がお決まりの席だ。だから、ときどき私の席(?)に先客が座っていると、ちょっとイラッと来る。もちろん「そこ私の席ですよ」と言える訳もないので他の席に座るのだが、そんな日はどうも調子が出ない。人にはやはり落ち着く場所というものがあるんだと思う。

このように毎日同じバスに乗っていると、乗客の半分くらいは常連さんで「顔見知り」になってくる。顔見知りといっても文字通り「顔だけ知っている」関係で、名前も素性も何も知らない。早朝の高速バスでは会話する声はほとんど聞かれず、静まりかえっている。眠っている方も多いので大声で話をされても迷惑だが、それにしても誰もしゃべらない。前述の中学生兄弟も2人して常に眠っている（熟睡している）。毎日顔を合わせているのだから、いつか誰かに「だいぶ寒くなって来ましたね」などと話し掛けてみたい気持ちに駆られるが、話ができる雰囲気がない。バス通勤歴3年になるのに、まだ誰とも友達になれずにいるのはとても残念だ。

友達候補として私がいま一番気になっているのは、私が勝手に「チャーリー」と呼んでいる男の人だ。チャーリーはいつも琴似のバス停から乗ってくる。年齢はたぶん私と同じか少し上（50歳くらい）で、普通の日本人顔（のオジさん）だが、みごとな金髪だ。たぶん毛染めしていると思う。J Soul Brothersのようなオシャレ短髪のカムフラージュではない。中肉中背で特に引き締まったボディという印象もない（普通のオジさん体型）。おそらく本人は（ストーンズの）ブライアン・ジョーンズをイメージしていると思われるが、さらさら直毛のカムフラージュ・スタイルだ（金髪のカムフラージュみたいな感じ）。さらにスーツは細身の黒で、ネクタイは必ず赤。毎日同じ格好をしているので、スーツとネクタイは同じモノを7着以上用意しているのだろう。ファッションのテーマは「スウィング・ロンドン」もしくは「モッズ」だと思う。ファッションに対するセンスおよびこだわりは半端ないものが感じられ、他人に奇異の目で見られようが気にせず貫き通すその姿勢（生き様）は、既に神々しいまでのオーラをまとっている。初めてその姿を見て以来、ほぼ毎日、彼を目で探すようになってしまった。親しみと畏敬の念を込めて、いつのまにか「チャーリー」と心の中で呼ぶようになった。チャーリーは冬になるとヒョウ柄のコートを羽織る。おそらくフェイク・ファーだ。チャーリーはバスが高速道路を降りてすぐのバス停でバスを降りる。歩いていくチャーリーが入るのは北海道開発局（小樽）の建物だ。もしかして公務員なのかもしれない。ますます素敵に思えてくる。

人生初のバス通勤を始めてもう3年になる。いつまでも、このバス通勤ができるとも限らない。今年は成年で年男なのだから、ここはひとつ勇気を出して常連の方の誰かに声を掛けてみるのも良いかもしれない。「綺麗な柄のコートですね」などと自然と言えたら、素敵じゃないかと思う。

